

県立多治見病院 緩和ケアチーム通信

発行：県立多治見病院緩和ケアチーム 2020年6月号 vol.109

◆チームメンバーよりひとこと◆

こんにちは。緩和ケア内科の藤田建です。県立多治見病院に就任し約1年が経ちました。最近の大きな変化としては、今年度から緩和ケアチーム体制が新しく強化されたことです。これにより、緩和ケア病棟で行っている症状緩和治療を一般病棟でもより早期から提供できるようになりました。少しでも早く症状を楽に、そして安心して退院できる療養調整を積極的に行っています。チーム活動が新しくなり2ヶ月ほど経ちましたが、今一番気になることは「緩和ケア」という言葉に対する患者様の反応です。「緩和ケア」と聞くと「もうそんな段階なのか・・・」と落胆されたり、「まだそんな段階ではない!」と仰る患者様もいらっしゃいます。しかし、緩和ケアは抗がん治療と天秤にかけて選択する治療ではなく、抗がん治療を縁の下で支える医療です。決して終末期だけに行われる医療ではありません。2010年に「進行肺がん患者に対する緩和ケアにより生存期間延長およびQOLが改善する」という論文が世界的に有名な学術誌に掲載されたことが、大きな医学的根拠の一つです。緩和ケアはがんと直接闘う治療を行うわけではありませんが、身体的な苦痛や心の苦痛、社会的な苦痛などを取り除くことで抗がん治療を受けやすい環境を整え、全人的に支えることで間接的に「がんと闘う」医療です。(私見かもしれませんが・・・)もし主治医から緩和ケアチームの介入を勧めるお話があっても、安心してください。緩和ケアに「もう」や「まだ」などという枕詞はつきません。「診断されたときからの緩和ケア」です。がんと闘う患者様を早期の段階から支援させていただきますので、「緩和ケア」という言葉に抵抗を感じず、身近なものとして知っていただければと思います。症状緩和につきましては、医師として常に最新の知識を取り入れた治療を提案させていただきますので、今後ともよろしく願いいたします。



今年の4月から緩和ケア病棟師長を拝命しております。今までは、緩和ケア通信の一読者でしたが、自分が緩和ケア通信に寄稿することになるとは思いも寄らないことでした。4月からの関わりの中で感じたことは、緩和ケアの充実の難しさです。緩和ケア病棟・緩和ケアチーム・在宅緩和ケアそれぞれが十分に機能することで、切れ目のない質の高い緩和ケアが提供できると思いますが、現状としてはもう少し発展の余地がありそうです。がん診療拠点病院であることから、在宅医療との連携の要としての役割を果たしていくことができるように、体制整備をしていきたいと思っております。当緩和ケア病棟はこの6月で開設10年となりました。この10年には多くの出会いと別れがあったことと思っております。多くの方々を支えられて今があります。支えてくださっている方々に恥ずかしくないような病棟運営をしていきたいと思っております。苦しんでいる方や困っている方の受け入れを積極的に行い、少しでも笑顔になれるようなお手伝いがしていけたらという思いでスタッフ一同頑張っております。患者家族の悲嘆を支えるスタッフ。そのスタッフを支えたい私。手一杯であたふたしている私を支えるスタッフ。患者家族の笑顔に癒される私。そんな支えあいの中でそれぞれの生を大切にしていきたいと思う今日この頃です。緩和ケア通信の読者の方には、緩和ケアに不慣れな私を大見に見ていただきながら叱咤激励いただければ幸いです。今後ともよろしく願いいたします。

緩和ケア病棟師長 加納久美子



◆令和2年度の緩和ケア勉強会について◆

令和2年度の緩和ケア勉強会は、当院の会議等開催制限が解除されてから再開する予定です。申し訳ありませんが、もうしばらくお待ちください。

